

昭和五二年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)261-7079

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額300円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

総評三〇周年記念大会に望む……………2

◇座談会 同時選挙を考える(下)◇……………3

社会党は基本路線を堅持せよ……………3

◇投稿 京都からの報告◇……………9

社会党・総評に不当な弾圧……………9

総評指導部をきびしく批判……………10

― 私鉄総連第五回中央委報告 ―……………10

〔資料 私鉄総連春闘総括(要旨)〕……………12

ブリッジ 共闘を拡充……………12

タイ・カンボジア国境衝突について……………13

― ベトナムの「侵略」はデッチ上げ ―……………13

光州は人民蜂起の戦場となった……………15

― 光州事件の目撃者の証言(二) ―……………15

キューバ「難民問題」について……………17

◇出版案内◇……………17

岩井・灰原編著『階級的労働運動への道……………17

七〇年代労働運動の総括と八〇年代労働運動への提言』……………17

旬刊 社会通信

NO.97

一九八〇年八月一日

一九八〇年八月一日

(毎月一日・二日・二日三回発行)

■巻頭言■

総評三〇周年記念大会に望む

総評は七月八日、第四回拡大評議員会を開き、①衆参同時選挙の総括とこれからのたたかい、②一九八〇年度運動方針、他三件を討議、決定した。七月二一日からの大会は総評三〇周年の記念すべき大会である。ただ、三〇年の歳月を経たというだけではない。総評が永々として築き上げてきた階級的労働運動の道を、フラフラせず鮮明に指し示すかどうか問われる大会であるからである。

われわれは先の拡大評議員会（五月二六日）で提起された運動方針の骨格を「総評結成三〇周年大会方針には不適格」（本誌第九四号）と評した。それは、あれほど批判が強かつた同時選挙で破産した「連合時代への対応↓労働統一」↓労働四団体共闘↓社公「民」路線↓八%要求のウワついた方針が何の反省もなく運動方針の柱とされていたからであり、同時に組合民主主義の姿をそこにみることができなかったからである。

この誤りは、今度の総評でも改められていない。いぜんとして元のままである。しかも、新運動方新案では「壮大なる戦線統一」が冒頭に掲げられ、一九七四年以来総評運動の要であった「国民春闘の強化」の項を欠いている。内容でいっているから、わざわざ項目をおすまでもないというのであろうか。

総評は残念ながら迫力に欠けた。全金、全港灣、東京地評、奈良県評など、それに共産党系の医労協、運輸一般、新聞労連の八名が発言した。「八%要求は職場の批判が強かった。設定前に十分な討議が必要」「職場労働者の生活実態に根ざした要求をうちだせ」との意見、四団体共闘についても「必要だが総評の団結を強化することが何よりも重要」と評議員は発言した。また政治路線についても「まず総評みずからが安保・自衛隊問題への反対の態度を明らかにせよ」「社公構想は幻に終わった。再び革新統一戦線に立ちもどれ」といわれた。それぞれに正しい意見である。

他方、「社会党候補の事務所の前で社会党批判の演説をする共産党のやり方は我慢できない。地評大会では共産党のあいさつを断る方向だが、総評大会ではどうするのか」との発言もみられた。

富塚事務局長は、「連合時代の認識はまちがいでない。八%、四団体共闘についてもやり方がまずかっただけ」と述べ、「（共産党系評議員の発言に）新聞労連は紙代値上げでどうたたかっただのか」と切り返す。会場は「そうだ」とヤジと笑いでしらけてしまうといった具合である。

共産党系の人々は総評の右傾化を口をきわめて批判する。だが、それだけである。全労働者が「そうだ」と納得するに足る運動に欠けている。他方、社会党系の評議員の発言には、選挙戦、春闘での共産党への憎悪がある。富塚事務局長の答弁は、これを計算に入れたものであった。

こうして、総評は、総評右傾化阻止とともに統一労働組合運動の克服の必要を、くっきりと浮き彫りにしたことが大きな特徴である。総評大会を社共の空中戦にすることなく、職場労働者の実態をしっかりとふまえた実りあるものにしなければならない。それが、猛烈な合理化のなかで、総評結成三〇年に期待する数千万労働者の声だからである。（丁）

◇座談会 同時選挙を考える (下)◇

社会党は基本路線を堅持せよ

“連合”論はなぜ破産したのか

司会 統一戦線の形成、発展のために何が必要かは、今論じていただいたことから明らかだが、今次の同時選挙と関連させながら、もう少し論じていただきたい。

B くり返しになるが、独占、政府、自民党は“単独か連合か”“安定か混乱か”“自由社会を守れ”を最大のスローガンとした。つまり、社会主義攻撃に全力を上げた。だから客観的、主体的情勢が本当に成熟して、統一戦線政府ができるようなときには、もっとシビアに体制の問題が前面にでてくる。チリの場合も、先に述べたフランスの場合にもそれは明らかだ。

D 統一戦線政府は社会主義政権ではない。チリのアジェンデ政府を社会主義政権と呼ぶ人もいるようだが、これはまちがいだ。こちらが統一戦線政府を呼びかけ民主主義的政府をつくらうとしたって、今Bさんがいわれたように、敵・独占は体制擁護を前面に掲げてくる。今回の場合、野党の“連合”論と大衆のあいだのすきまを突いてきたわけだ。

C それだけに大衆運動が重要なんです。院内外のたたかいが結合され、社会主義政党的正しい指導があったときにのみ、敵の攻撃を打ち破ることができる。チリの場合だってそうでしょう。

司会 そうです。チリの場合にも、大衆運動が高揚している時、アメリカやチリの反動家たちのあいだに、無力感があった。それだけに、大衆運動の分断に全力を注いでいる。農民と労働者、労働者と自営業主、そして労働者内部の分断ですね。これとともに、政党間のいわゆる“政府綱領”にも足並みの乱れが顕著となり、最後は社共の公開論争にまでなつた。つまり、統一戦線を発展させる統一司令部の機能が、喪失させられていった。最後に軍事クーデターと、こうなる。

C 国会の分野でも、今度の“連合”論議に歯がゆさがあった。総評が法案についても同盟に合わせさせてもってくる。闘争しないで、つまり大衆闘争ぬきに国会で民社から社会党までまとめると。だから、院内共闘といってもつまらない取り引きだけで、何もやれないことになる。

同盟との共闘は大事にしなければならぬのはもちろんだが、本当に共闘を大事にすること、前進させるためには総評独自のたたかいが重要なんだ。Bさんも指摘していたが闘争をやりながら同盟を引っ張っていきける。総評はこれまでそうしていたし、同盟の多くの大衆も望んでいる。幹部を下から突き上げて、幹部たちが、民社・同盟は“今までどおりではいかん”“おれたちの地位が危くなる”となってはじめて“シャーン”とすることになる。そうした働きかけがなければ、総評の指導部がいくら“おれたちは保革連合には反対

だ」と口ではいってみても、民社・同盟ベースの連合にしかならない。

A だから、今の「連合」論議に労働者が燃えるわけではない。幹部は「次は巨大だ」と燃えるかもしれないが（笑）。実際、労働者、勤労者の生活を反映していないもの。もっともいい例が行政改革にあらわれていたように思う。これ、労働者のクビ切りでしょう。クビ切りをやるといっているのが「連合」構想だった。これで燃えてくれといっても無理だ。

社会党は基本路線を堅持せよ

D 「連合」論議と関連するが、社会党は「非武装・中立」をタナ上げしたじゃないか」との批判が強かった。それが、飛鳥田さんが苦戦した原因ではないかとも聞いている。

C 本誌第九二号「今こそ非武装・中立を高く掲げよ」、同第九六号「破産した二つの路線」にも明らかのように、実際にはタナ上げではない。しかし、タナ上げたような印象を与えた。これはまずかった。

D 党内の右派の諸君には「連合政府構想」をとおして、「安保必要」論にもっていきたいという願望がある。そうした背景があっただけに「飛鳥田発言」が、マスコミの好餌にされてしまった。

司会 いわゆる「協会・反協会」問題が大宣伝されたのは一九七七年ですが、その後の政治の流れを追ってみるとこうなる。

同じ七七年の「協会・反協会」問題のさなか、民社・公明両党が共産との絶縁を確認（一〇月）。翌七八年四月には京都府知事選、横浜市長選で、自民系連合が勝利します。他方、社会党では国会議員への代議員権付与（七八年）、中期経済政策第一次試案（社会主義の構想）での『道』批判（同）、社会主義ぬきの、百万党構想第一次案の提示（同）、そして大内氏らの『道』批判（七九年八月）とつづき、七九年には公明・民社の「中道連合政権構想」（一二月）、「社公合意」（一九八〇年一月）となり、四月には労働四団体が参院選につき社公民協力推進を確認するというように動いている。他方、独占自民の方は今年に入って、セキを切ったように軍備増強論がつづけている。公明、民社は周知のように安保、自衛隊肯定です。社会がその公明、民社にスリ寄っていった。だから、社会の基本路線への危惧の念は黨員ばかりでなく、これまで社会党に投票してきた支持者にも「社会党はなんで民社・公明といっしょにやるんだ」との声が数多くあった。

つまり、「社会党は変わりつつある」という空気がかつてなく強い背景、流れのなかでの選挙であり、五月二日の「飛鳥田発言」があった。だから、マスコミだけでなく、ライシャワーですら「社会党も安保支持になった」（東京、五・二四）と述べていたほどだ。**B** これは理論的な問題でもあるが、かりに自民が過半数を割って、こちら側が政府をひきうけなければならないというとき、いわゆるその特殊な情勢にあると認識した場合には、不一致点をタナ上げする場合もある。念のために申し上げるが、これは一般論です。今これをやるのが正しいといっているわけではありません。

先にA氏が述べたように、各党が各自の路線なり方針でたたかっていく、そして一致し

た問題について共闘したり連合したりしていくのが、本当の連合だ。したがって、一から十まですべて一致しなければ連合してはいけないということではない。これは自明なことだ。

ただ「非武装・中立」は基本的問題だ。本当にわれわれが統一戦線をつくりうる状況が熟しているとすれば、またつくらなければならない情勢が熟しているとすれば、「非武装・中立」が一つの客観的法則として目標になる。これは科学的社会主義の理論から必然的にでてくる結論だ。

C 憲法を守るという意味でね。

D そう。だから今はそこまで（情勢は）熟していないといえる。たんに「非武装・中立」「是」か「否」かだけでは、自民、独占の方から「戸じまり」論、「アフガン」問題をもってこられた場合、「非武装・中立」が「いい」とはならない。したがって、やはりもっと具体的に行革、財政赤字の問題、いわゆる労働者の生活の問題を前面に掲げたたい、政府のいう行革をどう粉碎していくかという大衆運動を高揚させる。このことによつて「非武装・中立」の運動も発展する必然性がある。そこまで大衆運動を高揚させえるかどうかの問題だが、その条件はしだいに成熟しはじめている。だから、社会党の『国民統一の基本綱領』が想定しているような「憲法擁護」の統一戦線が発展していくとすれば、「非武装・中立」が大衆運動の論理とならざるをえないわけだ。

C ようするに問題は大衆運動ぬきということにある。大衆運動ぬきだから、「非武装・中立」がタナ上げにならざるをえない。

A 国民のみんなが経済の軍事化、徴兵制発言に危惧の念をもっている時だけに、「非武装・中立」をムキになってやる必要があった。選挙の柱としてもね。

公明は宗教政党的限界を露呈

司会 「非武装・中立」をめぐる問題は社会党は今後どうたかかわなければならないかを示すものだ。社会党への評価はほぼこの問題につきると思うが、次に各党の評価に移っていただきたい。

A まず公明だが、この党は宗教政党的限界を一九七〇年以降の選挙結果が明らかにしている。しかも、この党は中小零細企業主、労働者の最下層を階級的基盤としている。したがって、今日の資本主義的合理化、それからする産業再編成の犠牲をもっとも大きくこうむる要素もある。現在の宗教は「来世の恩恵」ではなく、「現世の恩恵」を立脚点としている。だから、経済の「規模の増大」が困難になっている今日、公明の存在する基盤は大きく動揺している。

C しかも週刊誌が元創価学会会長のスキャンダルを大々的に宣伝した。今回の選挙についていえば、これも影響をおよぼしたことはまちがいない。

B 公明は、ようするにプチブル政党だ。だから、みずから歴史を切り拓く能力はない。資本と賃労働の隙を揺れ動くだけです。現在、総評・社会党の力を独占・自民が圧倒して

いるから、ずっと自民に近寄っていったが、これだけ負けると、この党の階級的基盤からも自民から離れる方向にいかずにはおかない。だから、公明をわが方に近づけるためには、総評・社会党が大衆闘争を強め、力で圧倒する必要がある。

A 選挙のさなか、池田大作の批判が週刊誌で大々的にやられた。これは保守の側が、公明に政教分離をやらせ、公明の票をとりこもうとしたことのあらわれではないか。

C つぶそうというわけ？

A 宗教的カリスマの権威をおとす。そうすれば、創価学会が不安定になり、彼らを結合しているちゅう帯が弱まる。これによって、民社同様、自民の意志をこの党に反映させられる。

憲法改悪問題が重要課題に？

C 公明に直接関連することではないが、今回の選挙結果をみて危惧する点がある。現在、衆院の全議席は五一一。憲法改悪阻止のための勢力は三分の一プラス一ですから一七一議席となる。社会・共産は護憲勢力の中心ですが、合わせて一三六議席。公明も護憲を唱えているから、これを合わせて一六九です。社共三党では三分の一を超えることはできない。ここに社民連の三を加えてようやく一七二となる。民社がむこうにいけば改憲できる。

A 民社は「大砲でバターを」の論理で軍需生産を拡大する姿勢をとみに強めているが、憲法前文、九条「改悪」までにはまだ時間がかかるだろう。すぐ「改悪」とはならないが、有事立法から改憲へという問題が残る。

C それだけに、憲法擁護が積極的にはからねばなるまい。そこで、われわれの課題なのだが、公明を大事にしながら共産を批判する必要もある。社会党批判だけでなく、共産の公明批判はすごかったからね。

A 共産の公明批判は宗教蔑視だ。これはよくない。公明の連中は宗教を心から信じているのだから、われわれの方からまじめに呼びかけ、説得する必要がある。

C しかも、公明は憲法を大事にするといっているのだから、それを大事にしないではないんだ。

「六党軍団」とたたかうという共産党

司会 共産の話がでたところで、共産党問題に移っていただきましょうか。

A 六月二三日、同党は「衆院選挙の結果について」を発表し、そこでこう述べている。

「今回の後退の背景として、社会党の右転落をはじめ、反共布陣が強化されたうえ、自民党から社会党まで六党軍団がアフガニスタン問題などを利用して低俗な反共中傷、デマ攻撃をわが党に集中させた状況下で、わが党が果敢に反共攻撃と反共布陣突破のたたかいをくりひろげたものの、これを突破しつくすにはいたらなかった。」

つまり、「六党軍団」とのたたかいを強化するというわけですね。ここに同党のもつ「独善性」が象徴的に示されている。

B そうなんだ。社会党への批判も批判の域をはるかに超え、誹謗と中傷しかいようのないものになっている。だから、科学的社会主義には関心があるといっている人々、それに社会党でも全野党共闘を進めるために全力をつくしているそうした人々にまで、「共産党は統一戦線、統一戦線と口ではいうが、ちっともそんなことを考えてはいないではないか」とみずから信頼を失うことにしかなっていない。

司会 統一労組懇運動でもそうだ。

D 例は無数にあるが一つだけ上げるとね。東京一区の立合い演説の会場で、共産党支持者が飛鳥田氏に猛烈なヤジをとばす。次は自民候補の番だけれども、飛鳥田氏の持時間が終わればヤジるだけヤジって引き上げる。だから、社会党の支持者は「あんた方は社会党だけ批判するのか。どうして自民党を批判しないのか」と彼らに言ったというんだ。本当の敵は独占と自民なんだ。ところが、彼らは「自分が勝つ」ことだけしか考えていない。東京五区、三区なんかでも「高沢、山本をおとせばおれたちがとおる」という具合に、とにかくひどい。これが状況でしょう。

C 福本イズムが再現されている。

A そこでこれまたわれわれの課題にもどるんだが、選挙戦をつうじて明らかになったことは、「社会党の変質」を懸念している人が数多くいる。これは選挙をやった人が異口同音にいつていることからだ。だが、結果はその人たちが共産支持へとならなかった。このことの意味、これは重要だと思う。つまり、真の反独占・反自民の戦線がつけられることを期待している人たちの存在に社会党左派は確信をもつべきことを示すものといえる。

統一労組懇運動にはブレーキ

B 統一労組懇はどうなるだろうか。

司会 ブレーキがかかると思う。この問題をめぐって共産党潮流にもいろいろな考え方があつる。そればかりでなく、社会党批判のやり方についても「これでは勝てないから改めべきだ」との意見が出始めていたと聞いている。だが、そのためには社会党左派がいすべきことはチャンと主張する。そして、七月中旬からはじまる組合大会に現場労働者の声を反映する努力が必要だ。次に民社の評価はどうでしょうか。

自民助けた自民党

B 民社が保革連合構想を発表し、自民ですらもてあました栗栖を抱えたことは、自民をひじょうに有利にした。参院の東京地方区がその典型だ。新聞は「ハトとタカの決戦」と宇都宮と栗栖を表したが、どうして宇都宮がハト派になるのか。宇都宮を推したのは新自クでしょう。新自クは自民の別動隊にすぎません。本当の「ハト派」は社会党です。こうして、自民は軍備増強論を民社に転化させ、その批判をかわした。

しかし、こうした民社の路線は、「あれでは自民とちっとも変わらない。民社に投票する必要もないではないか」との意識を急速に生み出すと思う。だから、私は民社の存在価値

値は今までもなかったが、これからは急速に減退方向に向かうと推測している。

A 民社がこの選挙で自らすすんで積極的に体制擁護政党であることを示そうとしたことね。社会党攻撃をこの党はかつてなく強力にやっている。「無責任政党に鉄槌を」とね。

この党の社会党攻撃は、社会党が「反体制」である点に集中していた。

C それに企業ぐるみ。同盟のとりくみの活発さは、とくに大阪で目を見はらせるものがあった。この背景には、総評が同盟路線にスリ寄ってる。おれたちの路線の正しさが証明されているとの自負がある。だから、ここでもやはり総評が従来路線、資本主義的合理化反対、労働者階級の搾取からの解放をめざす運動に立ちもどることの緊要性が示されている。総評が「戦略なき柔軟路線」をさまよっているかぎり、同盟、民社ブロックの活力はそう簡単に簡単に減退しまい。

A さらに、社会党までが民社・公明にスリ寄り、反戦平和、帝国主義反対、自衛隊・安保反対のスローガンを薄めることは、今まで自民や民社に投票することに後めたさを感じていた人から、その意識をとっぱらう役割をも果たしていると思う。

危機意識が組織づくりを呼んだ自民

司会 自民についてはどうですか。

A くり返し述べられていることだが、この党はかつてなく大衆を動かした。三〇〇万党员と権力機構を利用した組織的集票活動の徹底ぶりが目についた。全国区における官僚など組織バックの候補者が上位を独占している。これは七四年以降の独占の動きとその反映なんだ。

C 独占の危機意識がその背後にあった。五月二三日付の『毎日』でしたか、独占が参院七〇億、衆院五〇億、派閥に三〇億と、じつに一五〇億もの金を今度の選挙につきこんだことを報じていた。実際はこれに倍する金が使われたことはまちがいない。

司会 まさに、独占、自民は金権選挙をやっている。たしかに自民は絶対過半数を得た。だが、資本主義の矛盾が世界的規模で拡大しているわけだから、この傾向が定着するわけではない。そこで、これからの展望とわれわれの課題に話しを移したい。(つづく)

(九頁からつづく)

官憲の不当な取り調べでの疲れも見せず、本田君は「遅くまでこんなに多くの仲間が私のために集っていただいてありがとうございます。今回の経験で、資本主義にたいする見方がつくづく甘かったと思いました。『本田君ガンバレ』というみんなの声が聞こえてくると元気が出ました。インターナショナルの歌が聞こえてくると、うれしくなって窓際でいっしょに口ずさみ、涙が出ました。京都で社会党の国会議席はなくなりましたが、社会党しかないんですから、これからがんばります。私は弱い人間ですが、反独占・反自民・社会主義に向けてたたかっていきます」と、いつものたんたんとした調子で喜びと決意を語ってくれました。

七月六日には、午後六時から全通洛東支部会議室において、本田君の激励集会が社会党、社青同、全日農の友人によって開かれ、本田君の健闘をたたえ、ねぎらい、全専売京都支部林委員長をはじめ残る二名の釈放をかちとる決意を固めました。(京都・A)

◆投稿 京都からの報告◆

社会党・総評に不当な弾圧

今回の衆・参両院選挙闘争にかんして、京都府警察本部は社会党・総評にたいして集中的な攻撃をかけ、公選法違反を口実に八名もの仲間を逮捕しました。社会党、社会党支持労組、全日農はあげて八つの警察署と府警本部、検察庁に抗議行動をおこなっています。社青同も連日行動に参加し、勾留理由開示公判にも社会党、労組とともに積極的にとりくみ、七月六日まで六名の仲間の釈放をかちとってきています。

京都府警は選挙中より組合員宅を訪れ、おどしすかしの選挙妨害をしながら、投票のすんだ六月二三日より二六日までの間に、全日農線下補償連合会二名、全専売労組一名、全電通労組四名、京都競輪労組一名の仲間を不当にも逮捕しました。ほとんどが「文書違反」の容疑ですが、労働組合・民主団体が民主的に討論して決めた推せん候補者を組合員に知らせるために、組合のニュースに載せて組合員に配布したことが逮捕の理由になっています。従来からの労組、団体でもやってきたことであり、また「文書違反」であれば必要な時間だけ呼び出しておだやかに取り調べをすればすむことです。それを一〇日間以上も勾留し、非人間的な扱いを続けているのです。

今回の京都府警の態度は、たんに選挙違反の疑いを調べるのではなく、労働組合・農民組合そのものに弾圧を加え、組織の弱体化を狙ったきわめて悪質な組織攻撃といえます。また、自民党をはじめ、他の政党にはなんら手をふれない、社会党・総評ブロックへの集中攻撃でもあります。

連日の各警察署前での抗議行動には、社会党、労組、社青同、全日農、部落解放同盟その他の多くの仲間が結集し、日一日とその支援の輪は拡がっています。またこれと連携をとりながら、弁護士、府市会議員団の活動も精力的に関係当局にたいして進められています。そして五回にわたって京都地方裁判所で開かれた、八名の仲間の勾留理由開示公判には、二百名、三百名、八百名と多くの仲間が参加しています。

七月二日午後三時より開かれた全日農線下補償連吉川書記長、本田書記次長の勾留理由開示公判の支援集会には社青同の仲間が四〇名参加し、全員が傍聴団として入廷し、久しぶりに二人の仲間の元気な姿を見て、激励することができました。そして七月四日夕刻の抗議行動に参加していた仲間うれしいニュースがはいり、午後八時一五分に本田君の釈放をかちとることができました。

真暗になった府警本部前に多くの仲間が心待ちしているところに、検察庁より車で本田君が手錠をされ、腰縄を結ばれて連れて来られました。検事勾留がとけているのになおも見せしめのようにする権力のやり方に「おまえら人間か」との仲間全員の怒りの声があがりました。間もなく元気に出てきた本田君を囲んで「一二日間にわたる官憲の不当弾圧に屈せずたたかった本田君の奮闘を賞える集会」を社青同、社会党、全日農、全専売、京水労、全通、全電通をはじめ多くの労働組合の仲間の参加を得て開きました。一二日間の

(八頁につづく)

総評指導部をきびしく批判

——私鉄総連第五回中央委報告——

七月一五日の私鉄、電機の大会を皮切りに大会シーズンに入る。二月以降、労働者の賃金が実質低下を示していること、野党への選挙民の厳しい批判は、組合大会が平穩には終わらない兆候を示している。各組合の春闘総括の視点についてはこれまでも報告してきた。ここでは私鉄総連の中央委と方針案を掲げておきたい。
(編集部)

私鉄総連は六月一〇日、新潟県の長岡文化会館で第五回中央委員会を開き、七月一六日から予定される全国大会に提案される運動方針案をめぐって論議をおこなった。

この方針案は、①八〇国民春闘の総括②八一国民春闘構想③反合理化闘争、交通政策闘争④労働戦線の統一——などを主要な柱にしており、その冒頭で「平和なくして生活も労働もなく、民主主義の徹底なくして運動の進展もない」と反戦・平和運動の強化を訴えているのが一つの特徴。

総評は限度をふまえよ

また、方針案の基調となる春闘のたたかい方について黒川委員長代行は、そのあいさつで、「従来型の共闘パターンが大きく変わろうとしている」との認識のもとに、①交通共闘はお互いの条件を認め合い、主体性を尊重し合って共闘態勢を組み、交通ストの力をつつのように発揮するかを考えなければならない②七単産ブリッジ共闘は、賃金相場決定に責任をもつ単産の集まりであり、要求づくりの第一歩から話し合いをすすめ、要求の考え方、あり方もそろえられるよう努力しつつ秋のはじめの段階からトップだけでなく実務者レベルで話し合いを始めるべきだ——として「二つの共闘を脚下から積み上げるなかで、文字通りの総からみ態勢を来年は一步前進させたい」と述べた。

さらに、政治路線について黒川委員長代行は「社会党は反安保・非武装・中立・反自民反独占などのこれまでの基本路線を堅持することを求めつつも、自民党政治を変えるために状況に応じた政策的妥協は柔軟性をもって対処してもらいたい」と要請。さらに「政権構想や共同政府綱領などは政党的領域の問題で、労組としては平和と民主主義、生活と権利を守る国民的課題を忠実に反映し、その要求を実現していく政策、綱領には是々非々の立場で協力、共同していく」と政党と労働組合の支持・協力関係のあり方についての原則を強調した。これは最近の総評の社会党との関係のもち方にたいする私鉄総連としての批判的な立場を明らかにしたものだ。このあとの質疑にたいする答弁で田村書記長は「公明党、民社党の社会党の政策にたいする詰寄り方は容認できない。これ以上の政策的な妥協はできない。なぜあれだけの妥協をしなければならないのか。総評に大きな責任がある。今年、社会党の大会の前日に総評の臨時大会をぶつけ、社・公政権構想の大合唱をした。こういうセットの仕方も疑問だった。労働組合としての限度を踏まえるべきだ。選挙にどうい

う政策を掲げるかは政党が決めることだ。社会党が自主的に選択できる余地は残さなければならぬ。総評の指導は無原則に政治に気を使わず、肝心の所に気を使っていない」などきびしく批判した。

八%要求に強い批判

中央委員会は衆・参同時選挙の際中に開かれたために本格的な論議はなく、八〇春闘総括や主要闘争の基本路線などをめぐる質疑だけがおこなわれた。

このなかで、労働四団体の賃上げ八%要求基準にたいしては「ナショナル・センターの幹部が決めた要求基準が上限になって、容器を決められてしまった」といった要求水準の低さにたいする不満が出された。また、統一要求の設定のあり方について「われわれが生活防衛を主張するのにたいして同盟・JCは経済の整合性を主張する。経済サイドの意見が反映されるこの主張からは要求を職場の討議で決めるということは出てこない。賃金や要求設定の考え方に基本的な隔たりがあるので議論もい方向に発展するとは考えられない」など七単産ブリッジ共闘重視に批判的な意見が出された。これにたいして田村書記長は「八%基準にたいしては総評の民間単産会議として春闘共闘・五役会議に反対の立場を申し入れていた。統一要求には賛成だが、八%でなければ一致できないのなら出さない方がましだと主張した。しかし八%を一方的に押し付けてきた。こういうやり方が来年も続くようだったら私鉄の立場をもう少し主張する」「七単産ブリッジ共闘のなかでも賃金要求にたいして考え方は基本的に違う。あれだけ儲けがあって『一過性』などと説明しているのだから一致できるか分らない。そろいそうだというなら賃上げ要求案を年明けまで延ばしてもいいが、そろい見通しがつかなければ例年通り二中委で決める」などの考えを明らかにした。共闘問題では田村書記長は「交運共闘を基軸にして全方位外交でたたいやすい環境をつくりたい」と答弁した。

春闘のたたい方に関連して「民鉄協は『話し合い路線は完成の域に達しつつある』と発言している。そんななかで書記長が『一発回答だから悪い』というのではない」と言え、あたり前のことを言ったでは通らない。なぜなら、私鉄を潰しておけば八〇年代労働運動はギクシャクさせないでおけるといふ相手側の戦略があるからだ。「ストなし」を両手を上げて受け止められない」といった「ストなし春闘」への危惧が出された。ストライキについて今回の運動方針は「ストのないことを前提に、方針を考えるのは誤り」として金属労協などを批判しているが、昨年論議をよんだ事後対処方式には「戦術は年ごとの条件と情勢に見合って考える」として「スト投票実施を回答以前にもおこなえるように努力したのは適切だった」と八〇春闘戦術を総括している。こうした立場は田村書記長の「賃金に重点をおく年と運動に重点をおく年があってもいい」といった合理主義的な発言に表われているように、「賃金は力(運動)で勝ち取るもの」という原則からの後退に通じる危険性も含んでいるようだ。

「反合理化」の視点を確立せよ

同時にこのことは反合理化闘争の基本姿勢にも通じている。方針案は「労働者の労働条件、権利を守る要求で対決することから出発し、この中で、資本の運動法則を正しくつか

み、階級対立という事実を頭と身体でつかむ」という反合理化闘争の基本を正しく提起している。しかし、他方で「自民党政治の流れを根本的に変えるにはどうするか、という展望なしにはたたかいは進展しない」という基本認識を前提に「反合闘争は情勢のなかで妥協もやむをえない」（田村書記長）と強調すれば、結果的に反合理化闘争は放棄されて、結局政策闘争の前進もおぼつかなくなるのではないか。

中央委員会ではこうした点の討論はおこなわれなかったが、総評民間単産の中核であり、春闘の「主役」を演じる私鉄総連だけに、大会での論議が注目されよう。（A）

資料 私鉄総連春闘総括（要旨） ブリッジ共闘を拡充

八〇国民春闘について一、その年ごとの条件と情勢に見合って、戦術は考えるべきであるが、今回のように、スト投票実施を回答以前にも行えるよう努力したことや、金属労協の回答のあとに私鉄の回答日を設定することとし、それが不満な場合は、四月中旬をめざしてヤマ場を求めていく戦術構想を立てたことは適切だったといえよう。

一、交連単産間の共闘としては、七九春闘における変則的な公労委調停が先に回転せずという事態が生まれ、一時は労働者委員の辞任まで発展し、その後の政局の激変も加って、さらに解決がおくれたことは遺憾なことである。

今後の共闘を前進させるためには、限度はあっても当事者能力をもっている私鉄の交渉と、その力はゼロに近い公労協の交渉とは、大きな違いがあり、また賃金決定の方法上の違いがあることを認めつつ、相互の理解と信頼が増幅されていく方向で、共闘の組み方を検討していくのが大きな課題となる。

一、私鉄・バスの賃上げ水準は、本年に入ってから本格化しはじめ、賃上げ後も一段と激しさを増している物価上昇のなかで、実質賃金の維持、回復のためのミニマムすら確保できなかった不満な成果だといわざるをえないが他面、春闘全体の賃上げ状況をはじめ、金属労協各単産の賃上げ水準など先行の民間相場に比べれば、その上限に近い水準であり、与えられた条件の下では大方の予想を上回るような成果であったことは周知の事実である。それは私鉄・バス労働者の産別統一闘争への強い結果力がかちとった成果にほかならない。

八一国民春闘の構想（たたかいの基本路線）一、交通の大産業別共闘がもつ力と実績を大切に、日常からの統一性をもった要求や課題での交通共闘を地域から積み上げていく。同時に賃金決定に大きな影響力をもつ鉄鋼、電機、自動車、電力など民間基幹産業のたかかいと一体になって取り組めるようにとめ、要求づくりの段階から「七単産ブリッジ共闘」の場での意見交換をすすめ、民間労働者の生活と労働の実態に即した共通する要求を練り上げ、広く職場討議の場をつくり、積み重ね、確信をもってたたかえる要求決定のため努力する。

一、いわゆる「一発回答」については、組合内部でも今日多くの批判がある。これはこれまでの「一発回答」による賃金決定が、職場組合員に「たたかわずして……」との悪い印象を与えているためである。われわれとしては、回答が一発であろうと、二発であろうと、そのこと自体にこだわることなく内容が不満な場合は、ストライキを背景に、要求実現を迫まるという基本姿勢を定着していくよう八一春闘でも取り組んでいく。

タイ・カンボジア国境衝突について

——ベトナムの「侵略」はデッチ上げ——

一 事実関係

カンボジア難民は、主として旧ボル・ポト政権の民衆弾圧政治の結果、やむをえず隣国のタイやベトナム領に逃げた人々であり、その多くは祖国カンボジアへの帰還を求めている。ところが、後に政権を追われたボル・ポト派もタイ領に逃れ、そのさいに弾よけ、補助兵として多数のカンボジア住民を連行した。これにより難民内部の構成はかなり複雑になった。難民のなかに、帝国主義・国際反動勢力に依拠して現政権の打倒を画策する分子が多数混在するようになったからである。

カンボジアのヘン・サムリン現政権は、タイ領にいたるカンボジア人（難民）の帰国についてこれまでいくどもタイ政府に話し合いの提案をしてきた。しかし、いぜんとしてボル・ポト政権を支持し、現カンボジア政権の国際的承認をかたく拒否するタイ政府は、カンボジアとの交渉に応じようとしめない。応じれば現ヘン・サムリン政権を承認することになるからである。

こうしてタイ政府は六月一七日、カンボジア政府の話し合い提案を無視し、カンボジア難民をタイ・カンボジア国境へ向け「自由意志にもとづく帰国」の名のもとに一方的に移送し始めた。実際にはこれはボル・ポト武装残党を国境に一大結集し、その兵力を補給し、それによってカンボジア領内への反革命勢力の侵攻を可能にすることをねらったものであった。

やがて二二、三両日にはタイ当局は、タイ軍の砲兵、戦車、航空機の援護のもとに、武装「難民」（反動派カンボジア人）をタイからカンボジア領内に侵入させた。このさいタイ軍隊はカンボジア領内に六キロ侵攻したのである。カンボジア側が自衛のためにこれら反動分子・タイ軍に反撃を加えるのは当然の権利である（ベトナム軍のカンボジア駐留は友好協力条約にもとづくもので、北京膨張主義、帝国主義勢力の脅威がなくなるとき、撤退する、というとり決めが両国間で結ばれている）。

二 背景

今回の出来事の背景をつかんでおくことは重要だ。以下、主要な点を列挙しておこう。
 (一) インドシナ、アンゴラ、エチオピア、ニカラグア、イラン、アフガニスタンその他の地域や国において近年アメリカ帝国主義と国際反動勢力の支配力が極端に低下した。それにつれて国際反動勢力と北京指導部の接近・協力は強化・拡大の途をたどっている。これらの勢力は世界的な失地回復に躍起になっている。

(二) ボル・ポト派をつうじてカンボジアを「大掃除」して中国人を大量移住させ、東南アジアの覇権拠点にしようとした中国の企ては失敗し、ヘン・サムリンを指導者とする愛国勢力が勝利した。いまソ連、ベトナム、その他社会主義国はカンボジアに食糧をはじめとする各種援助をおこなっている。

一方、帝国主義と北京指導部は、インドシナに紛争の火種を温存しようとして策動している。そしてそのために、カンボジア国内をかく乱し、悲惨な目に会ったカンボジアの農業、工業、行政の再建を妨害する勢力、すなわちボル・ポト軍やその他の残党を支援する戦略・

戦術を打ち出している。

〔秋の国連総会では、ボル・ポト派の国連での代表権の存続が問題にされるという事情があるので、アメリカ、中国その他の反動諸国としては、それまでボル・ポト政権にもちこたえてもらわねばならない。同時にカンボジア新政権が不安定であるかのような印象を国際世論に与えておきたいのである。〕

四数日後の六月二五、六日にはクアラルンプールで東南アジア諸国連合(ASEAN)の外相会議がひかえていた。また二七、八日にはASEAN諸国とアメリカ、日本などの参加による拡大外相会議が予定されていた。ベトナムはこれらASEAN諸国との積極的な対話路線を追求していた。そのため、今年になってベトナムのグエン・コ・タク外相はマレーシア、タイ、インドネシア三國を歴訪した。ちなみに今回の事件が発生した時、同外相は、有益な対話を求めてインドネシアを訪問中であつた。

〔ASEAN諸国の内部では最近、対ベトナム・カンボジア政策において足並みの乱れが目立ちはじめ、ベトナムとの平和共存を主張しはじめる勢力もあらわれてきた。また、ASEAN諸国内にはASEAN中立化構想、"アメリカ離れ"についてみても一応な対応がみられなくなってきた。〕

〔因今、カンボジアは雨期に入っており、カンボジア・ベトナム軍の国境警備活動はかなり困難になる。〕

主として以上の背景事情が今回のタイ当局の軍事行動の具体的スケジュールを規定したと言えよう。

三 各国の反応・立場

〔米国〕 ベトナムを強く批難し、タイへの軍事援助の大規模な増強に着手した。このタイへの武器援助増強の背景として、『毎日新聞』では、「兵器輸出に活路を求めようとする米国の軍産複合体の復権の動きも見逃せない」と指摘している(七月一日朝刊)。

〔中国〕 二六日、中国外務省は「中国はタイ政府の立場と闘争を断固として支持する」と声明するとともに、ベトナムに対する第二次懲罰をほのめかした。

〔日本〕 大来外相はベトナムを非難し、ASEAN諸国、とくにタイの立場を支持した。なお、日本のタイへの経済援助は急増し(今年度は合計五七〇億円の借款を供与)、タイは一躍中国、インドネシアと肩を並べる大型円借款国に格上げされることになった。

〔ASEAN諸国〕 外相会議の結果、ベトナムを「侵略」のかどで批難、ボル・ポト政権をひき続き承認することを声明、反ベトナムで結束を固めるにいたった。しかし、フィリピン、マレーシアなどの最高首脳は今後もベトナムとの対話路線を継続すると言明している。

〔カンボジア・ベトナム〕 タイおよび中国、米国を侵略およびその援助を理由に批難。カンボジアの外交上の原則的立場はひき続き「近隣諸国との平和、協力の外交政策の実行、これら諸国の主権、領土保全の尊重にある(ヘン・サムリン議長)」と訴えている。またベトナムは、「タイの独立、主権、領土保全を尊重するベトナムの従来の政策は不変である」と声明している。

〔ソ連〕 公式声明は出てないが、政府発行紙「イズベスチヤ」は、今回の出来事がASEAN外相会議の直前に起こったことに注目するとともに、これはASEAN諸国のベトナム社会主義共和国との関係発展の志向に不安を感じ、カンボジア人民共和国での今後の情勢安定化を妨げようと試みるワシントンと北京の煽動によるものである、と伝えている(六月二五、九日付)。

(T)

光州は人民蜂起の戦場となった

—— 光州事件の目撃者の証言(二) ——

第九五回にひきつづき光州蜂起の目撃者の証言『引き裂かれた旗』の要旨を『朝鮮時報』(六月五日付)から資料として転載する。(編集部)

三〇万の巨大な人波

△三二日▽ 催涙弾の刺激的な毒気があたり一面に充満し、目をあけては歩くことのできない熱気を帯び、廃きょと化した都心は、そのまま修羅場としかいいようがない。デモの群衆のたたかいが激烈になると、ふたたび戒厳軍の無差別発砲が加えられてきた。あちこちで悲鳴を発して倒れていく若者たちの数をだれが数えられようか。市民は火山地帯を連想させる錦南大路通りに集まり始めた。三十万以上と推定される巨大な人波が大通りを埋めつくし、長蛇の列をなした。話には聞いていたベッパ・フォグ(こしよう弾)の威力がどんなものかをはじめ知った私は、続けざまに出るくしゃみと流れ出る鼻水や涙を拭いながら、群衆の間に割り込んで行った。

戒厳軍の銃口からはふたたび火が吹きはじめた。装甲車の上でスローガンを叫んでいた中学三年ぐらいの少年が、額と腹部から赤い血を吐きながら倒れた。群衆に向って降りそぐ実弾は、雨あられのように降りしきった。私の前で指揮していた青年が「アイグノ」というひと声を残して倒れた。担架を用意できなかったデモ群衆は、背中に背負ったり、角材で担架をつくって患者や屍を運んだ。

銃弾を避けようと退却する群衆に押され、ある路地を曲がったところ、そこにはもうひとつの大きな不幸が民衆を待っていた。広さ三メートルの狭い路地へ数千人が押し寄せたため、押されて踏まれ倒れた人、その上にまた覆いかぶさって踏みつけられ、五十数人の死傷者を出してしまった。幸いにも折れたり引き裂かれたりしたところはないにしても、私もこれで終わりだと覚悟して目をつむったが、奇跡的に生きていた。

「市民の皆さん! 血を下さい。献血をして下さい。血がなくて患者が死んでいきます!」学生たちはマイクをとおして声をかぎりに献血を訴えてきた。あちこちで献血しようという男女が進み出た。「献血車」と血で書かれた救急車に乗せられて赤十字病室に到着した病院に入ると、血なまぐさい臭気が吐き気をもよおした。あちこちの病院の廊下や病院は患者でいっぱいになった。どこにも座って採血する空間がなかった。どうしようもなくふたたび車に乗り、他の病院へ向かった。揚林洞の橋であった。集まった群衆のなかのある青年が制しずたひとりの戒厳軍に石を投げた。彼はなよなよとぶっ倒れた。学生風の青年ふたりがその鉄かぶとをぬがせ、その場で頭をめった打ちにした。民衆は拍手をした。初めて復しゅうをしたという彼らの顔には勝利の喜びが波打っていた。私の胸にも彼らと同じように、戒厳軍ひとりやつつけたというそう快な興奮がこみあがってきた。

銃を手にとり対抗

△二三日▽ 光州市内のすべての戒厳軍は、外郭地に退却。道庁は市民が占拠した。デモ群衆は三十一（予備）師団、和順、松汀里（先山郡）、羅州、咸平などで武器を略奪してきた。銃が四千余丁、実弾が約五万発、手榴弾、ダイナマイトなど、十分に戒厳軍とたたかえるだけの武器を確保したということだ。重武装した軍人たちと対抗しなければ、犬死にする者の数ばかり増やす無謀をさと、彼らは作戦を変えたのである。

いまや彼らの手には角材と工具、シャベル、鶴はしのかわりにカービン銃、LMG小銃、手榴弾が握られた。

中学生の手に手榴弾が握られた。小学生がカービン銃をとった。家に帰っていた子どもたちは午後にはふたたびもどってきた。

明け方の鉄道に並んでいた死体の山を見てびくびくしてきてもどってきたというのだ。市外へ抜け出ようとした群衆たちが戒厳軍の銃弾に撃たれて倒れてしまったのである。

地下室に四七五の死体

新任内閣の総理一団が光州に来るといふ報道を聞き、市民たちは総理を迎えるためふたたび道庁に集結した。

すでに戒厳軍が退却した道庁は廃虚の都市、軍靴のように殺伐とした敗戦の都市の姿を露にした。

数十万の群衆は道庁前で熱い陽射しと渴症も何のその、五時間も座って待った。

市民たちは道庁の地下室から死体を取りだし、広場に積みはじめた。忍耐と自制でもって発砲を抑えるため数多い軍警の犠牲を払ったという政府の報道がどんなふざけた流言蜚語なのかを総理の前にはっきり見せてやろうというつもりだった。

道庁の地下室には、顔を見分けられないほど火炎放射器に焦がされたり、裂かれたりした死体が四七五体も放置されているのを見た市民たちは、ふたたび憤りで歯ざしりした。

五時、六時、市民たちは徐々に気抜けして散らばりはじめた。死体は、ふたたび地下室へ移された。

「自由という木は血を吸って育つ」

総理は、市民と会って対話しようという約束を無惨に反古にし、光州には足も踏み入れないまま暴徒という名を残し、ふたたびソウルへ飛んでいってしまったのである。戒厳分所長の事態の報告だけを受けて、事態收拾の特使はこうのようにして就任後をはじめの出張に不渡りを出して姿を消した。

戒厳軍とだけ面談して、行ってしまったのだ。「治安不在、無法の都市」「暴徒の牛耳る都市」という名を残して。

怒りにたえられず腹から内臓がとびだしているにもかかわらず、ある青年は血で「自由という木は血を吸って育つ」と書いていた。

△二四日▽ 高空飛行してバラまくビラは、形は「呼訴文」だが、内容は欺瞞と術策でかためられた脅迫だった。

放送内容もかえって市民の感情を激化させるだけで鎮めさせることはできなかった。

「政府は忍耐と自制で発砲できず、数多くの軍警が犠牲となりました。市民の皆さんは固定間諜や暴徒らに幻惑されています。一日も早く理性を取り戻し、家へ帰ってください。暴徒らと分離してください。何人かの負傷者はよく治療しています」というなど、図式化され硬直した嘘で市民をなだめすかそうとする「呼訴文」を握った市民たちは憤慨せざるをえなかった。

民衆はだまされぬ

恐怖の都市から逃避しようと戒嚴軍の目をさげ、山を越え、川を渡り、市外へ抜け出ようという彼らの後姿はたたかいが吹きあれていったある敗戦国の避難民と異なるところがなかった。

現役将校たちも怒りをおさえきれず、身震いしているこのむごたらしい事態がもたらした人命被害は、デモ群衆の車両を指揮していた某大学生が伝えるところによると射殺された人は千二百人、交通事故・銃剣などにより死んだ人は八百余人、合わせて二千余人をこえるというが、死体を確認してみない以上何もいえない。病院をうめている負傷者が血と医薬品が足らず死んでいくという。その数字はさらに増えていくものと予測されており、ある宗教団体では死傷者数を二十数万人と推算しているという。

目をとじれば

鮮かにあがる

引き裂かれた旗

頬には熱い涙が

流れても流れてもあふれおつ

(おわり)

キューバ「難民問題」について

(編集部より―難民とは政治的理由から生命に危険を生じたため、他国へ避難する人々のことである。このような意味では、キューバ難民(社会的脱落分子である)も、ベトナム難民(富裕な華僑とベトナム商人)と同様難民とは言えない。それは加速度的な腐朽化の道を歩む帝国主義の常とう手段であるデマ宣伝である。しかしわれわれには、帝国主義のデマ宣伝の真の意図を見抜かねばならない。今回はソ連の週刊紙「新時代」五月三週号から、V・グリバチョフ署名入りの記事を訳出した)

ワシントンが世界のどこかを「緊迫地域」と宣言したら、それは、その地域の諸国がアメリカの干渉外交政策の目標になったということの意味する。このたびは、カリブ海沿岸地域が、とりわけキューバが、この「緊迫地域」と宣言され、アメリカ合衆国は、そこで

の「自国の利益を死守する」という意図をあらわしたのである。
ラテンアメリカには、激しい社会的、政治的変化が生じている。その原因は、ワシントンにも十分わかっていながら、にもかかわらず彼らは、これらすべてが「キューバの陰謀」

の結果ひき起されたのだと強弁している。そしてもちろん、キューバの裏でソ連が糸を引いている、と言いき張るのだ。合衆国のニュースメディアがこぞって、キューバにたいするキャンペーンで大騒ぎをしたのは昨年のことだった。それは「ソビエト戦闘部隊」のキューバ進出という馬鹿げた話をまきちらすことよって開始されたが、これは、やがて高度な脅威が生じた、という宣告につながった。もはや、反キューバ・キャンペーンが次のようなはつきりとした理由によってでっち上げられたことは明らかである。つまり、例のごとく、「ソ連の脅威」と結びつけられた「キューバの脅威」は、今後予測されるカリブ海諸国へのアメリカの軍事力行使にとっての好都合な口実として持ちこたされたのである。

合衆国防省は、今やラテンアメリカへの軍事介入のための根まわしを完成させつつあり、この地帯各地に軍事基地を拡大し、キューバ上空のスパイ飛行を再開し、カリブ海機動部隊総司令部を設置したのである。また最近では、国防省から議会にたいし、カリブ海諸国への経済援助に金をまわすよう要請が出されている。それは「社会的変化とありうべき共産主義者の支配の樹立に対抗しよう、それら諸国の国民の能力を強化するため」である。

ここ数ヶ月、合衆国政府は、明らかに挑発の目的を持って、「キューバ難民問題」をめぐるキャンペーンを張っている。ワシントンでは、このキューバの人たちは「政治的難民」として取り扱われている。だが、キューバ政府がはつきり述べているように、合衆国へ入って来るキューバ人が「反社会的分子、犯罪者、麻薬中毒患者の集団」であるのは間違いない。合衆国移民局でさえ「難民」の大部分が教養を欠く人々であり、いかなる国の法律にてらしても犯罪者である人々も多い、と認めている。しかし、だからといってCIAはあきらめはしない。CIAは、これら「政治的難民」を、キューバにたいする破壊活動要員として、既に組織し始めている。

『難民問題』をめぐる謀略的宣伝は、まさしくキューバの社会主義体制の信用失墜をねらった挑発行為である。と同時にこの問題は、カリブ海地域に合衆国の軍事網を作り上げることが正当化する手段として、利用されているのだ。

合衆国は、キューバを脅迫することに必死である。だが、ホワイトハウスは、このような政治的・軍事的挑発が強力な抵抗をひきおこすことを予想しなかったのだろうか？ 反キューバ・キャンペーンは、ソ連邦やその他社会主義諸国によって手きびしく非難された。ラテンアメリカでは、ホワイトハウスが「重大な関心を持っている」まさにその当事者である諸国の人民によって、酷評をあげたのである。ワシントンの破壊的行動にたいする抗議集会の報道や、公的・政治的指導者の声明などが、西ドイツ、スイス、シリア、コロンビア、カナダ、グレナダといった諸国から送られて来ている。ソ連・キューバ国交樹立二〇周年記念の大衆集会がモスクワで開かれたが、ここでは、ますます激しくなったアメリカ帝国主義の挑発に反対して、かの自由の島国と連帯する決議が採択された。抗議の波が、ワシントンにたいするはつきりとした解答なのである。キューバを脅迫することはできない。キューバは孤立していないのだ。

(S)